

心に具するを言う。なぜ至誠心に他の二心が具するかというと善導の教えによれば、南無阿彌陀仏というのは『浄土三部経』に命終みんじゆうのとき決定往生する行であると説かれており、それによって一向専修の身となるからであると言う。同様に一向に信じるから深心中にも至誠心・回向発願心があり、また回向発願心中にも別の心があるわけではなく善導の、真実深心中に回向して往生することを願うのを回向発願心と言う、との文を引き説明している。

これによって、『阿彌陀経』には一心不乱と言い『往生論』には世尊我一心と言う、としている。

このように聖光は、横の三心によって法然では明確とは言えなかった『観経』の三心と『阿彌陀経』の一心を結び付けたのである。法然は行具の三心で『観経』の三心と『無量寿経』の本願の三心を結び付け、聖光は横の三心でさらに『阿彌陀経』の一心とを結び付け、ここに『浄土三部経』の心が一致したと言える。

#### 第五項 安心の広略

さらに聖光は付け加えて、『阿彌陀経』と『往生論』の一心を略説、『観経』の三心を広略として安心の広略を分別している（『浄全』十、一六三頁上）。

なぜ『阿彌陀経』では一心かと言えば『阿彌陀経』に説かれるときはすでに往生のための

心が深いので虚仮の心も疑心も不定の心も起こらないから一心であって、『観經』は浄土の行が初めてで浅い人のために、虚仮心を停止させるために至誠心を、疑心を停止させるために深心を、不定の心を停止させるために回向発願心を説いたのであると言い安心の広略を説いた。これは横堅の三心と同義である。先に述べたように、聖光の意は一心と三心の関係から『浄土三部經』の心を引き出したわけではないかと思われる。

補足すれば、『西宗要』の「第十六 阿弥陀経念仏往生機事」〔浄全〕十、一六九頁下）に『阿弥陀経』の一心についての細積がある。

ここでの問題は『阿弥陀経』を説いた対象としての機は何かということである。つまり一心不乱と言うからには定善の機を対象に説かれたものであるとする考え方に、聖光は一心とは定散にわたるものとして捉え、定善とは心を一つに凝縮することを言うが、今ここで言う一心は散心の中に雑行を止めて一向念仏することとし、散心を止めて定心になれと言うのではないと断定している。

第六項 能化のうけの三心・所化しよけの三心

聖光の言葉でもう一つ注目したいのが、この能化の三心・所化の三心という言葉である。なぜなら、これは他の法然門下との思想の違いを明確に端的に示す言葉だからである。この